

令和6年度(2024年度)第2回伊丹市立総合教育センター運営協議会 議事録

1 日 時 令和7年(2025年)2月3日(月)

2 場 所 伊丹市立総合教育センター 2階 研修室

3 出席者 元大阪教育大学教職大学院教授 深野 康久
伊丹 PTA 連合会代表 藤井 健太
こうのいけ幼稚園 園長 吉田 典子
瑞穂小学校 校長 村上 雅博
松崎中学校 校長 今井 克己
鈴原小学校 教頭 村上 英里
稲野小学校 主幹教諭 久田 浩嗣
天王寺川中学校 教諭 小林 滉大
教育委員会 教育総務部長 宇谷 敏幸
教育委員会 学校教育部長 廣重 久美子
事務局 山下 拓志郎
戸田 政男
江尻 純子
松本 唯
窪田 えみか
小野 晋弘
近田 拓郎
片岡 栄二郎
三宅 貴章

4 総合教育センター 所長あいさつ

本日はご多用の中、伊丹市立総合教育センター第2回運営協議会にご出席いただき、感謝申し上げます。

運営協議会、表紙及び別冊の資料を見てもわかるように、今年度で30周年を迎えた。この節目にあたって当センターの歴史を紐解くと、現教育長をはじめ諸先輩方がその時代の課題に真摯に向き合ってきた研究集録等が見つかり、それをふり返ると熱意や情熱を感じた。

また、研究内容は様々だが、取組に共通して創意工夫とチャレンジ精神が脈々と受け継がれている。我々も受け継がれてきたものを大切にしながら、喫緊の課題である不登校児童生徒への対応などについて研修、研究の観点から取組を進めていく。「カラフルな教育」はこれらの課題に対応するものとして提案している。「カラフルな教育」について少し触れると、これまで

の教育の優れた部分は受け継ぎながら、今を生きる子どもたちと学校教育とのズレが生じているが、それに柔軟に対応していくという思いから提案している。子どもたち一人ひとりにちがいがあことを前提とし、そのちがいを豊かさにつなげていくことを理念とした「カラフルな教育」を学校園とともに実現していく。

本日は、「カラフルな教育」を実現するための教育の情報化や保護者、子どもとともに心理的に支える教育相談、すでに不登校となった生徒の社会的自立を目指した教育支援センターやまびこなど、当センターの運営の充実に向けて、ご協議いただきたい。

5 会長あいさつ

第2回運営協議会にご出席いただき、感謝申し上げます。

昨年度の今頃は能登地震があり、自然をすごく意識した。今年になって先日、道路の陥没が埼玉でおこった。これは、人間がやってきたことをふり返るきっかけと感じている。総合教育センターができて30年となり、歴史をふり返る重要性を感じた。

第1回で令和6年度の方向性について説明を受けた。第2回では、令和6年度の総括と令和7年度に向けての説明をお願いしたい。

今回、資料の変更がある。左側には令和6年度の状況、右側には令和7年度の取組が書いてある。数値については、一番後ろに記載している。今回、運営協議会の進め方として、所長に要望しているのは、今年状況について全体の説明をしたのち、項目ごとに説明することだ。全体の説明と項目ごとの説明で質問の時間を取りたい。最後、委員一人ひとりから全体をまとめてご意見を頂戴する。特に、来年に向けてのご意見を頂戴したい。

6 議事

(所長)

総合教育センターの建物が30年経っており、先日変圧機を交換したところだ。また、電話機も交換することになっており、現在そのような機器の整備が行われている。建物管理もしている当センターは会場を先生方が使いやすいように机の配置をアレンジしてみたり、置くものを変えてみたりと努力を重ねているところだ。

当センターでは、研修、調査・研究、教育の情報化、教育相談、不登校児童生徒の支援の5つの柱で事業を展開している。いずれの事業でも共通して、教員、子ども、市民目線で事業の改善に取り組んできた。改善方法としては、ICT を積極的に活用して取り組んできた。簡単ではあるが、各事業での取組を説明する。

研修においては、アンケートや資料などのデジタル化を行い、教員がより簡単に鮮やかな資料を閲覧できるようにした。また、デジタルによるわかりやすい周知に努め、イラストを添えた周知なども積極的に行った。カリキュラムセンターでは、2人のコンサルタントがいるが、相談をオンラインでできるように整備しているところだ。

教育の情報化においては、今年度学習eポータルを導入した。これは、子どもたちのタブレッ

ト端末の利便性の向上を図るものだ。また、学習eポータルでは子どもたちのログイン情報などを一元化して見ることができ、教員にとって様々な教育データが集まる環境が構築されてきている。このような教育データ利活用に向けた環境整備も進めている。さらに、学校からの報告についてワークフローを試行し、担当教員から所属長を経て報告をあげることができるシステムを導入している。

教育相談においては、ICT を活用して、継続相談者に向けた臨時的な相談としてオンライン相談を整備した。現在、クライアントにアンケートをとり、運用に向けて進めているところだ。

不登校児童生徒については、オンラインを活用し、やまびこ在籍者を対象に支援を始めた。この支援により、オンラインでつながった生徒が今までやまびこに来所できていなかったのにやまびこに来所できるようになった好事例もある。今後もリアルな体験やつながりを充実するためのツールとして ICT をとらえ、活用していきたい。

このように、いろいろな変化がこの1年でも起きたが、変化は改善の必要条件と考え、新しいことにチャレンジをしている。今後も子どもや教員の声を聴きながら、取組を進めたい。

簡単ではあるが、ここまでが全体像である。

3ページ。総事業活動統計である。12月31日時点でのものだ。各欄の右側に、令和5年度の数値を入れているが、これは年度末の数値であり、単純に比較できるものではない。参考までにご覧いただきたい。研修受講者合計が3790人。昨年度の同時期の数値は3650人。今年度はプラス140人であり、ほぼ同水準と考える。研修の受講者が増加したように見えるが、まだ実施していない研修もあるので、最終的な数値は年度末となる。

5ページ。令和7年度、事業体系案である。令和6年度の大きな変更点としては、研修と調査研究である。

研修については、さらに多くの教員に学んでもらうため、ニーズに応じた魅力ある研修を実現できるよう変更を行った。具体的には、若手教員のためのスキルアップ講座において5年未満という縛りをなくした。これにより、より広い世代が研修に参加できるようにした。また、道徳、英語、防災、理科の研修については、学校教育課との連携を通じて、授業力向上講座に統合した。さらに、生徒指導の研修については、ウェルビーイングと教育課題の2つの視点で行う。

調査研究については、4本の柱から2本の柱に変更した。これは「カラフルな教育」の充実に向けた学校支援の在り方と授業におけるタブレット活用研究だ。

以上簡単ではあるが、全体の事業説明を終了する。

(事務局)

6ページ。研修について、説明する。令和6年度の成果と課題をあげている。2番の実施方針、実施内容にあるように今年度も多様な研修を実施してきた。研修の詳細については、20ページの参考資料に記載している。本年度は新たな取組として、オンデマンド講座を2講座開設した。また、伊丹マイスターとの連携講座を若手教員向けに実施した。併せて資料配布やアンケー

ト回答にタブレット端末を活用した。

主な成果として、情報発信に力を入れてきたことが挙げられる。

成果1、夏季研修前には YES・NO チャートを活用したおすすめの研修チェックリストでどんな視点で研修に参加すればいいのかなどをリーフレットに入れ、受講奨励ツールとして発信した。研修後には ICT 活用により集計したアンケート結果をもとに、リフレクションも作成した。一部はセンターホームページでも発信し、教員が日々研鑽している姿を教職員以外にも発信している。

成果2、教職員向けグループウェアを活用し、市内研究発表会や市外の研究会、研修会の情報発信を行うことで多様な学びを教職員向けに発信した。

課題と改善策としては、課題1、多様な情報を発信してきたが、情報がわかりづらい、多すぎるとい声があり、情報の受け手である教職員の目線に立った発信の検討を行っていく。

課題2、夏季研修の時期については校内の研修との重なりが多く、参加したいのにできなかったという声が多くあり、次年度は一週間遅らせての開始を検討している。併せて、オンデマンドコンテンツやオンライン研修は校内の夏季研修等での活用を学校園にも提案していく。

課題3、学び続ける教職員の資質向上として、キャリア形成も含め多様な学びの場の支援にラーニング・コミュニティの醸成を検討している。

令和7年度研修事業重点目標案について、7ページをご覧いただきたい。

本年度、総合教育センターでは、「子どもたちの学びの姿」に焦点を当て、ちがいを豊かさにつなげる「カラフルな教育」の提案、発信を行ってきた。この「カラフルな教育」をキーワードに教職員の資質向上を図るため、2の実施内容に取り組む。特に新たな取組についてご紹介する。

(2) ①、従来の「初任者訪問指導」という名称はどうしても指導される・指導を受けるとい意味合いが強くなっているため、スタートサポート・フォローアップと名称変更し、初任者の伴走支援を充実させていく。

(2) ⑤希望する採用予定者に向けたプログラムとして今年度より、情報発信やカリキュラムセンターの利用案内を行っている。

(1) ③及び(4) ②、先ほど課題でもお伝えした、ラーニング・コミュニティの構築である。校種や教科等、所属する場所にとらわれず、多様な先生とつながるネットワークをつくりたいと考える。学習 e ポータルを活用し、板書や指導案を共有できるアプリの活用からオンラインでのコミュニティの醸成に試行的に取り組んでいる。

(4) ②、形態だけではなく研修デザインとして、内容・環境の構成も含め学びの場の充実を図る。

(事務局)

続いて8、9ページをご覧いただきたい。

授業力向上(カリキュラム)支援センター事業について説明する。

まず主な成果としては、3点ある。1点目、ラーニング・コミュニティの場を提供するためワークステーションのレイアウト変更を行ったことで、貸室の利用者増につながった。

2点目、QRコードを活用した電子受付名簿を各貸室に配置することで、利用者の利便性を向上させた。3点目、コンサルタントへの相談を対面のみではなく、相談者に合わせたニーズに応えられるようオンライン相談を開設し、相談者の利便性を向上させた。

次に、課題として今年度カリキュラムセンターの受付名簿を電子名簿に変更したが、まだ電子登録が浸透しておらず、登録のないままの利用があり、周知徹底を行っていく必要がある。また、貸室の利用者や図書の利用は増加傾向にあるが、依然としてカリキュラムセンターの利用者に偏りがあり、新たな利用者の増加には必ずしもつながっていない。

先ほどの課題解決に向けて次年度は、さらなる利便性の向上に努めていく。まず、カリキュラムセンターの利用増を図っていくため、新刊を入荷した際は、グループウェア掲示板での告知を行う。次に、各学校へ出張貸し出しを行う。出張貸し出しをすることで、各学校の先生方が書籍に触れる機会が増え、新たな学びの創造につなげていく。さらに、コンサルタントへの相談をワークフローで配備し、コンサルタントへの相談を身近なものにすることで、若手教員をはじめ市内の教職員が相談しやすい環境を整えていきたい。

(事務局)

私からは、校内研究の活性化について、説明する。

令和2年度より、学校力アップ事業が、総合教育センターに移管された。それから、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善に向け、学校にどのような支援をすればよいか、調査研究を進めてきた。10ページにあるのは、今年度の各学校の研究をまとめたものだ。これまでも、授業研究会での指導助言や、研究推進計画の立案及び推進に向けての、研究主任への支援等を行ってきた。これまでの調査研究をもとに、令和7年度からの、取組を校内研究の活性化としてまとめたものが11ページになる。伊丹市では、3年を1サイクルとして全ての学校で研究活動を行っている。総合教育センターでは、各学校の研究活動が活性化し、子ども一人ひとりを大切に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が進むとともに、総合教育センターが目指す「カラフルな教育」の充実に向け、アウトリーチによる伴走支援を今後も実施していく。

以上で校内研究の活性化の説明を終わる。

私からは、調査研究について、説明する。

令和6年度は、「研究・研修活動の充実に向けた学校支援のあり方」「全国学力・学習状況調査分析」「授業におけるタブレット活用研究」「教育支援センターにおける効果的な支援」の4つを調査研究してきた。

「研究・研修活動の充実に向けた学校支援のあり方」については、先ほど校内研究の活性化の際に説明した。

「全国学力・学習状況調査分析」については、今年度、調査結果報告書作成は学校教育課へ移管された。総合教育センターでは、調査結果をもとに、どのような教育が伊丹市には必

要なのかを研究し、リーフレットにまとめた。

それが、表紙の裏にある、「子どもたちのウェルビーイングのための授業改善」だ。私たちは、「カラフルな教育」と名付け、伊丹市の教育として、今後大切にしていきたいと考えている。

「授業におけるタブレット活用研究」や、「教育支援センターにおける効果的な支援」についても、子どもの幸せの実現のために何が必要なのかという視点を大切に研究してきた。調査研究の成果としては、今年度、リーフレット等での教職員への情報発信に力を入れ、多くの先生方に読んでいただいた。また、調査研究したことは、各事業の改善に活かしたい。しかし、調査研究の内容について、精選していく必要があると考え、来年度からは、『『カラフルな教育』の充実に向けた学校支援のあり方』と「授業におけるタブレット活用研究」の2つにした。

『『カラフルな教育』の充実に向けた学校支援のあり方』については、「カラフルな教育」のあり方について研究を進めるとともに、特に、学び続ける教育を支援するための「ラーニング・コミュニティ」のあり方についても、調査研究していきたい。

「授業におけるタブレット活用研究」については、特に、学習eポータルから得られる教育データの利活用について調査研究を進めていきたい。

以上で調査研究の説明を終わる。

(会長)

研修の中身を変える話があったが、教育の状況を考えると変化をし続けていくことは伊丹の特徴であると感じた。また、センターの取組が教職員や市民にもっと伝わるように、発信していく大切さを感じた。さらに、ラーニング・コミュニティは大事にして進めていきたい。

(副会長)

ラーニング・コミュニティについて具体的に教えていただきたい。

(所長)

資料の最終ページを見ていただきたい。

「カラフルな教育」を作る伊丹市教職員のラーニング・コミュニティの構築という資料があるが、4つの柱である育成・交流・実践・発信からなるものを考えている。一番メインとなるコミュニティが交流と考えている。特に、交流の中で、グループ研究を自由に多様化していき主体的なものにしていきたいと考える。また、オンライン・コミュニティの活用では学習eポータル内のバンショットを活用し、つながりをつくっている。初任者研修等で紹介し、登録者を増やしている。バンショットは、黒板の写真を掲載し、それについてグループ内で共有し交流することができる。さらに、研修を通したコミュニティの醸成は学校に対し

て業務命令として伝えるのではなく、自然的につながり広がっていくという手法を取りたいと考えている。すでにコミュニティはできてきており、それらを発信しているところだ。このような形でラーニング・コミュニティを進めていきたいと考える。

(事務局)

14ページ。私からは「教育の情報化」について申し上げます。冊子の14ページからご覧いただきたい。1と2については、第1回運営協議会にて申し上げたので割愛する。

3「成果と課題・改善策」について説明する。

まず、今年度は特に、グループウェア（ガルーン）での情報発信に力を入れてきた。今後、先生方に伝わりやすい内容を工夫して発信していきたい。

また、児童生徒タブレット端末について、今年度から夜間のインターネット利用制限を開始した。端末の持ち帰りについても小学1年生について持ち帰りの開始時期や頻度を学校で判断できるように変更した。来年度についても、家庭における活用とタブレット端末の運用方法について検討していく。

さらに、今年度より学習eポータル「まなびポケット」を導入した。まなびポケットから各種システムにシームレスに接続できる環境が今後の授業におけるICT活用に資するものと考えている。来年度には、保護者連絡機能、欠席連絡機能もまなびポケットに統合し、さらなる利便性の向上を目指す。

今年度の課題としては、学校園における情報セキュリティ対策の徹底が挙げられる。児童生徒の情報モラルの向上はもちろんのこと、教職員の情報セキュリティに関する意識を高め、児童生徒の個人情報や著作権、肖像権などを適切に守ることができる運用ができるよう、今後もグループウェアでの発信、アウトリーチ型研修や情報セキュリティ研修等を実施し、伊丹市全体の情報セキュリティレベルの向上を図る。

15ページ。来年度の重点目標について説明する。

事業目的は情報活用能力の育成、校務の情報化の2つの面での取組を継続する。具体的な内容として、令和2年度に導入された児童生徒のタブレット端末の更新を実施する。GIGAスクール構想第1期で蓄積されたメリット・デメリットを踏まえ、子どもたちがより使いやすい環境や教員が端末を管理し活用しやすい環境を目指して、その環境構築や運用についても検討を進めていく。また、教員が使用する校務端末をはじめとした各種ICT機器も更新を行う。さらに、教育DX推進室や教育委員会各課と連携を密にして子どもたちと教員が安心してICTを活用できる環境を構築すべく、整備計画を策定していく。

教育の情報化からは以上である。

(委員)

現状、キーボードの不具合が出てきている。6年生のタブレットが新1年生にわたること、はじめからキーボードが使えない状況が出てくると予想される。それについて、対策を

とっていただきたい。また、来年度タブレット端末の更新があり、タブレット端末の破損時の弁償について、保護者に早い段階で周知する必要があると感じている。

以上の2点について、タブレット端末更新で不安を感じているところだ。

(事務局)

キーボードについては、今年度手当できる分もあるが、難しいところもある。新年度早い段階で年次更新までのことについて学校や保護者に対してアナウンスしていきたい。

(所長)

キーボードは加速度的に年数が経つと壊れていく。3年保証がついていて、3年間は交換で対応していたが、それを過ぎてしまい対応が困難になっている。現状の調査を行い、新中一には新しいものを配備する予定である。来年度、学力調査があり、理科のC B T化に伴い、キーボードの不具合で不利にならないよう対応する予定だ。ただ全ての子どもたちに平等に配布できる状況ではないことと来年度タブレット端末の更新があることを鑑み、財政部局と調整しながら協議しているところだ。

(委員)

現在、G o o g l e クラスルームをP T Aは情報発信のツールとして使用している。来年度からG o o g l e クラスルームが使用不可になり、学習eポータルで情報発信したいと考える。また、コミュニティ・スクールの意義が問われるのではと懸念しているため、コミュニティ・スクールについて情報発信をしていかないといけないと感じている。コミュニティ・スクールに関して、保護者の認識も低いと感じており、情報発信の重要性を感じる。以上のことをご検討いただきたい。

(事務局)

16、17ページ。教育相談事業について説明する。

まず、主な成果として、昨年度末、待機数が30あったが、今年度、1名相談員を増員することにより、現時点の待機数は1（土曜日の限定的な枠希望分のみ）となり、待機数が減少した。相談枠についても、まだ枠に余裕があり、新規の予約をとれる状況にある。

また、今年度から臨時的ではあるが、クライアントのニーズに対応していくためにオンライン相談も試験的に開設した。現在、全クライアントにオンライン相談に関するアンケートを実施し、ニーズ調査を行っている。今後、アンケートを参考にしながら、体調不良や急用等での相談欠席時にオンライン相談を実施していく。

次に課題として、「不登校」の相談ケースの増加がある。現在、全ケースの約半数は「不登校」の相談となっている。関係機関と連携できているケースはあるが、全く連携ができていないケースもあり、学校園や関係機関との連携を図り、情報交換をしていく必要がある。

課題の解消に向け、今年度は新たに外部機関（伊丹市民病院の相談員や放課後デイサービス、いたみ杉の子）との情報交換会を行った。学校園や他課だけにとどまらず、外部機関との連携を行うことで児童生徒に寄り添った支援体制を整えていく。

続いて次年度に向けてだが、今年度に引き続き、研修を通して相談員の資質向上に努める。

また、年度末にクライアントへ継続希望のアンケートを行い、長期化する相談の見直しを図ることやクライアントのニーズに合わせた相談の実施、学校園、他課、外部機関との積極的な連携を図り、クライアントに寄り添った支援を行う。

（事務局）

18ページ。事業目的は、「不登校児童生徒に対して、小集団による学習や体験学習により、社会的自立を支援する」としている。

令和6年度の取組とその成果と課題について申し上げる。

令和6年度には、(1)教育支援センター「やまびこ」の運営(2)運営委員会の開催(3)メンタルフレンドの派遣(4)「子どもの思春期を考える親のつどい」を実施した。特に今年度は、新たな取組として2(1)の⑥にあるようにやまびこに登録していても通所できていない児童生徒を対象として今年度の9月からオンラインでの支援を試行した。今年度の成果は、教育支援センター「やまびこ」の運営において、学校や関係機関との連携、また学習支援、体験活動を充実させたことにより、個に応じた支援の充実を図ることができた。また、オンライン支援の実施により、通所が難しかった生徒が参加できたり、オンラインへの参加をきっかけに通所できるようになったりするなどの成果がみられた。

課題としては、②にあるように、今年度試行的に実施したオンライン支援の課題をふまえ、来年度に向けて内容や実施方法を検討し、個に応じた幅広い支援ができるようにしていく必要がある。

③について、今年度特別支援学級在籍児童の受け入れを行った。その経験を通して入所の際には、様々な観点から学校と十分に協議をしたうえで、入所の是非、支援方法、学校との連携について検討していく必要があると考える。また、④にあるように、今後教職員に対して教育支援センターの運営内容や手続きについての周知を図る必要があると考えている。

続いて、令和7年度の事業実施方針について説明する。

まず(1)について、学校や関係機関、保護者との情報交換や連携を通して、個に応じた支援ができるように支援体制やカリキュラムの見直しを実施していく。また、やまびこに登録していても通所することができていない児童生徒に対してオンラインでの支援をすすめていく。

続いて(2)について、やまびこに登録していない市内の長期欠席児童生徒、保護者を対象としてオンラインでの個別支援をすすめていく。合わせて(3)の対面でのメンタルフレンドについても、多様な課題をもつ児童生徒とつながることができるよう、派遣希望者のニーズに対応できるよう体制を整えていく。(5)の「子どもの思春期を考える親のつどい」

の開催については、引き続き、市庁舎デジタルサイネージなどを活用し保護者や教職員に周知を図るなど、不登校で悩んでいる保護者への重要な取り組みとして、充実させていく。教育支援センター「やまびこ」、メンタルフレンドの12月末までの状況について、資料の(24)ページに記載している。

以上で不登校児童生徒の支援についての説明を終わる。

(会長)

教育相談について、不登校の相談以外の相談内容はどのようなものがあるか。

(事務局)

不登校以外となると、発達特性の相談、子育て、心身の健康が相談として多い内容になる。

(会長)

最後に、全体を通して、一人ずつご意見やご質問を頂戴したい。

(委員)

総合教育センターが30周年ということで、30年かけて教育が変わってきたと感じる。打ち出している「カラフルな教育」が一人ひとりの違いを大切に、一人ひとりの学びを協働することでみんなの学びを深めることにつなげる素敵な言葉と感じている。個別最適な学びと協働的な学びを大事にしていくためには、保育の中でも子どもの主体性を大事にしていく必要性を感じている。アウトリーチで各学校の支援をされているが、幼児教育も一緒に学ぶ機会があり、どのように小学校につながっていくかという幼小連携という視点からも学ばせていただいている。

(委員)

今年度総合教育センターは大きく変革したと感じている。印象に残っている言葉としては、「子どもの学びと教員の学びは相似形」がある。子どもの学びに主体性が求められている中で、教員も主体性が求められている。目から鱗の感覚を持っておかないといけないと感じている。実際に先進的な取組を見ることで、子どもの変化を体感する必要性を感じた。不登校を作らないようにしていきたいと考えている。見立てと知見が必要と感じているので、研修の中でそのようなことが学べたらと感じているところだ。

(委員)

全員の話の中で、オンラインやICTの話が盛り込まれていた。ICT化が進んでいることを感じている。先日、ネットワーク障害が起こったときに教員の動揺が大きかった。教員はタブレットを使うことを前提とした授業を準備していると感じ、そこにトラブルが起き

たときに全てのことが止まってしまう怖さも感じた。情報発信がわかりやすく、研修に行ってみたいと感じる場面も多かった。他校とやりとりしているときに、他校の研修会等に参加したいという意見があり、参加できるような仕組みになればと感じた。小中連携でそのような取組をされているところもあるかもしれないが、学校によっては連携がうまくできていないところもあるので、他校とのそのような連携も図れたらと感じた。

(委員)

「カラフルな教育」を打ち出していただき、イメージのしやすいわかりやすいものと感じている。来年度中学校では教科書の改訂があり、教育の仕方も変わる。教育のICT化が進み、今までは子どもの様子で把握してきていたところが、まなびポケットの心の健康観察により見えるようになった。情報量が多くなり、情報をどう活用していくのかを検討していく必要性を感じている。

(委員)

総合教育センターには感謝している。

(委員)

学校と地域とのつながりを大事にしていきたい。もっと地域に頼ってもらってもいいと感じている。「カラフルな教育」に地域として足せる色はあると感じている。

(委員)

新しいアイデアや今後のための前向きな課題を出していただきありがたいと感じる。いかに伝えていくか、いかに具現化していくかを大事にしていきたい。

(委員)

教育DXをさらに推進し、安全で快適なICT環境の整備に注力していきたい。

(事務局)

最後に副会長より閉会のあいさつをいただく。

(副会長)

総合教育センターが創設され、30年。現場と一体となった研修、不登校支援、相談活動に取り組んでいただき感謝している。学校現場はICTが必然的なものとなり、研修は総合教育センターがなくてはならない存在となっていると感じている。本校では今年度の校内研究会では学校運営協議会の委員にも参加をしていただく予定にしている。それにより、教員が学んでいる姿を見ていただき支援していただこうと考えている。そこで感じたことを

地域に発信してもらいたいと感じている。「カラフルな教育」という言葉が教員から出てきてほしいと感じている。今後も総合教育センターと学校、地域とともに子どもの未来をつくる取組を推進していけたらと思う。

(事務局)

本日も協議いただいたことや頂戴した貴重な意見を踏まえ、来年度の当センター事業がさらにいいものになるよう努めていく。